

閉院の報せ

公立学校共済組合東北中央病院 田中靖久

この報せが届いて、はや半年以上が過ぎてしまいました。正月早々のおめでたい医師会報にふさわしくない題名と話題かなとも懸念しましたが、報せを読んで心によみがえった記憶と深い感慨を忘れぬうちに書き留める良い機会と考えた次第であり、ご了承を賜りたいと存じます。

今から約20年前、昭和最後の夏、学位取得のめどが立ち、脊椎外科医を目指していた私は東北大学から整形外科の1人科長として塩釜掖済会病院への赴任を命じられました。病院は日本海員掖済会が直営するものの一つで、仙台から45号線を北上して塩釜の中心地を過ぎ、魚市場に向けて右折して進むと左側で寿司店の奥の小高い丘にひっそりと建って在りました。私にとっては殆ど馴染みのない病院であり、予め妻と共に下見に訪れて眺めたその外観は、大学病院や以前に勤務したことのある地方の中核病院に比べてあまりにみすぼらしいものでした。常勤医師が院長を含めて5名しかいないことにも納得がいきませんでした。落胆してみえた私に妻が励ましの言葉を掛けて呉れたことが思い出されます。しかし、現実には、働き始めてからもっと大きな落胆を味わうことになりました。

それまでの医師としての10年足らずの経験で、黙っていても患者は無尽蔵に押しかけてくるものだと思い込んで居りました。ところが、外来での診療が11時に、あるいはそれ以前にすら終了してしまいます。自ずと手術あるいは入院の患者は皆無に近く、午後の回診も必要がありません。医師は、患者がいなければ学んだことを生かすことも、新たに学ぶことも出来ません。聞けば、かつて組合活動に熱心なあまりに辞めさせられた医師が、シンパと一緒に玄関前で病院を非難するアジ演説を長期に亘り行っていた歴史がありました。一体、これまで自分なりに努力して来たことは何だったのか。博士号取得も無意味ではないか。暗澹たる気持ちに陥っている私に職員は無頓着に追い打ちをかけて来ます。「先生はいつ開業するのですか。」事実、それまでに科長を勤められていた2人は、病院に赴任して比較的短期間のうちに開業されていました。

そんな挫けそうな状況に、さる開業の先生から骨折の患者が紹介されてきました。その診療にどれほど喜びを感じたことか。時間を費やして問診を聴取し、理学的診察を行い、丁寧な返事の作成に努めました。そして、紹介患者のやりとりを重ねるうちに、実はそれまでの自分の医師としての姿勢あるいは態度に大きな誤りがあったことに気付かされました。傲慢さであり横柄さです。その後、先生からは外傷例に加えて、脊椎の慢性疾患も紹介して頂けるように成りました。

謙虚に努力すれば知らず知らずに患者は増えて行くものです。しかし、それが自分1人の力で達成できるもので無いことを浅はかな人間はすぐに忘れてしまいます。順調に脊椎の手術例も増えて来たある日、先生に思わぬ事を指摘されました。私の返事の筆跡には2種類があること、即ち丁寧である時とそうでない時があることです。恩人とも言える先生の言葉に深く赤面したことを覚えております。今でも、外来で忙しい折に返事を書きながら、その指摘を思い出しては、ペンを握り直したりあるいは新たに書き直すことがあります。

塩釜掖済会病院には結局1人科長のまま5年間お世話になりました。私がこれまでに最も学ぶことの多かった時代を問われたら、躊躇すること無くこの5年間を挙げます。私が辞めて数年後に病院は転地して利府掖済会病院と名も変わりました。無愛想ながらも美味しい寿司を食べさせて呉れた親方の店は健在ですが、その奥の小高い丘に最早、建物はありません。かつて沢山の患者を紹介して下さった塩釜の開業医、柴田尚一先生は昨年春、整形外科医院を閉院されました。何も知らない若輩者に大切な患者を託して呉れた同窓の大先輩に、改めて深い感謝の気持ちを表したいと思えます。